

## わが母の記第1回 2021-4-20

2021年4月度のKOZOOMサロン28の企画で「わが母の記」を募集しました。続々集まりだしましたので、まず初めの5名の方々の投稿順にご紹介します。この後も続けて集まり次第掲載していきます。今回投稿いただいた方々は投稿順に太田隆次様 藤本勇様 清水健二様 水谷真次郎様 野口幹夫の各氏です。



### 「わが母の記」

#### 太田隆次

##### 1. 母の竹ぼうき

国民学校4年生の時でした。秋の運動会があって帰って来たら玄関の庭先を竹ぼうきで掃除していた母が、私の顔を見るなり「今日の運動会はもう恥ずかしゅうて途中で帰ってきた」というのです。「あいな」と竹ぼうきで土に大きい運動場の楕円を描いて、「角を曲がる時は体を内側に傾けて回らんとあかんのにお前は外側をまっすぐ走っていた。そやから前の子たちはどんどん先に行くし、後の子たちはどんどんお前を抜いていく」と竹ぼうきで説明するのでした。

今思えば言葉は知らなくても、母は「遠心力」なるものを私に教えてくれたのでした。

##### 2. 深夜の大地震

同じ年頃の時、深夜に大きく揺れる地震があり、私は気が付きませんでした。母が飛び起きて揺れが収まるまで、かぶさるように私を抱きしめていました。後にも先にも母に抱きしめられたのはこの時の一回だけです。

##### 3. 映画と奥西武夫さん

中学3年生の時、同級だった奥西武夫さんから（高津高校では1Fでした）母宛てに、突然ハガキが来ました。

要点は「太田君に映画に誘ったらお母さんが許さないということですが、映画は

様々な人生を教えてください。どうか太田君に、映画を見に行くのを許してあげてください」ということでした。

何しろ映画の題名が「娼婦マノン」というので、母には言いそびれたのです。

## 「わが母の記」

藤本 勇

私は男三人女四人の七人姉妹の三男として生まれました。幼いころから母に「勇はよすけ」と呼ばれていて、子供ながら嫌な思い出がありました。もう子供は要らないと思っていたら妊娠したので仕方なく生んだとも言われた。

私が結婚した時には、長兄は四国。次兄は海外勤務。仕方なく母親の面倒をみるはめになった。

家内は商家の娘で苦勞することなく育てられた。私は安い給与のサラリーマン。新婚の家内はあまり母親とも相談なく、勝手に食材を買ってきては自慢の腕で料理を作った。それが気に入らぬかして、ある時、母親は家内の両親を呼びつけて、「お宅は娘にどんな教育をされていたのですか？」と問いただした。

それを聞いて家内と二人で家をとび出そうとした。一触即発の危機が何度かあったが、家内や親戚の叔母らに説得されて17年もの間母親の面倒をみるはめになった。

## 「母の涙」

清水健二

母は平成元年(1988年) 行年94歳で他界した。当時では大往生と言われた。母は私共家族と同居し、晩年介護施設に入ることも無く妻は最後を看取ったことで、私は母の死をさほど悲しむことも無く受け入れた。

私は大阪市内で生まれ、小学校(当時は国民学校)の低学年の頃は、両親と姉2人、妹1人、兄1人の7人家族だった。父は数年に亘り、単身赴任で満洲で勤務してい

たので、母親の手で育ったと言えよう。末っ子だったので、母には可愛がられたと想うが、躰が厳しく怖かった。

太平洋戦争(1941年)が始まって2年程すると、戦況の悪化と共に、夜は燈火管制に入り白熱電灯の傘の周りに黒い布をたらし、その下の明かりで母はよく針仕事をしていた。その傍で私はちゃぶ台を机代わりによく勉強した。母と私だけが一つの明かりの下で一緒に居ることが、子供心に安心感と温もりを感じていたと今も思っている。

母が父兄会などで学校から呼ばれ、担任の先生から子供の家庭内での生活状況を訊かれ、姉妹の場合はどう答えて良いのか分からず嫌だったが、私のことは、先生から「良く勉強し、真面目です」と言われて、「お母ちゃんは安心して聞いているだけで良かった」と、ほめられその言葉が励みになっていた。母が喜んでくれることが嬉しくて、よく勉強したのだと思う。

後年、社会人になってからも、「人は褒めて育てるものだ」と母の言動を大事に守ってきた。

父が満洲から帰国して間もなく、1943年、兄へ学徒動員で出陣の赤紙がきた。私は学校から帰宅すると、母が台所でしくしく泣いていた。

「お母ちゃん、どうしたん？」と問うても返事が無く、執拗に問う私に一言、「兄ちゃんが兵隊にゆくことになった」という。当時の私は、男は兵隊に行ってお国のために鬼畜米英をやっつけるものだと思っていたから、兄が居なくなるのが寂しいから、泣いているくらい感じしかなかった。母にとって戦地に往くことは、「死別」を意味する涙だったのである。

兄が近所の人々に祝福され、壇上から日の丸の旗を櫓にかけ、挨拶する姿に私は、格好いいなと感じていただけで、母の思いなど全く眼中になかった。

戦況は益々厳しくなってきた、学童の集団疎開や縁故疎開の話が進み、父の仕事のことも重なって、一家で現在の富田林市の田舎へ疎開することになった。両親と共に暮らせることで、集団疎開の寂しさを味わうことが無かったものの、飢えの辛さは忘れられないものだった。食糧難で両親は大変だただけに耐えるしかなかった。

終戦の1ヶ月前、1945年7月兄の戦死の知らせが入った。茨城県に駐屯していた兵舎が攻撃を受け犠牲になったという。すでに大阪市内は焼け野原となり、田舎も連日

アメリカの戦闘機グラマンによる機銃掃射に悩まされていた。両親は死に直面した毎日だっただけに、兄の死の悲しみを飲み込んで何も言わなかった。

疎開地から1里半(6km)程離れた太子町内で、大阪府と奈良県境の山深くに母の実家があった。お盆に先祖の墓参りと、兄の死の報告をしたいと母が言うので、私と母の2人で朝早く出かけた。当時バスも車もない田舎道を約2時間かけ、途中敵の飛行機に襲われたらいけないと、街道筋を避けて歩いた。

百姓をしていた実家は、母の兄(私の伯父)一家が暮らしていた。近所には親戚や母の幼な馴染みの人達がいて、「よう帰って来たなー」と迎え入れてくれた。母は伯父夫婦の顔を見るなり、私の兄の戦死を告げると、堰を切ったように号泣した。私ももらい泣きしたし、周囲にいた人達もみんな涙した。そして私に向かって、「健ちゃん!、兄ちゃんの代わりにお母ちゃんを大事にして親孝行をするんやで」と、私を励まし母をいたわった。

先祖の墓参りを済ませ、往路を再び辿って帰路に着いたが、道中「戦争が終わったみたいやで!」と言う声を聞いて、私には日本が負けたらしい。これからどうなるんやろう。と母に問うても何も言わなかった。母はこの先のことは全く分からなかったからだろう。

戦争が終わって、空襲警報のサイレンに怯える事はなくなったが、食への異常な程の欲望は絶えること無くその後も長く続いた。

今や有り余る食べ物を廃棄する時代になり、戦争を語れる人もなくなって来た。こうして「母の涙」を書きながら私は当時を思い出すと、正直、ブルーな気持ちになってくる。戦争の悲惨さに滅入ってしまい辛くなってきてしまうからである。できる事なら戦争体験など語りたくない。しかし語り継いでいかねば忘れられ、また悲劇が繰り返す事になりかねないと苦慮する。政治家が如何に戦争を正当化しようが、「戦争など二度と繰り返してはならない」とだけは大声で叫びたいと思っている。

令和3年(2021年)4月

## 言葉足らずのメロディ

水谷眞次郎

年をとると親のことがしきりに思い出されます。

同年配の友人から、歌謡曲にいい歌があるよと聞き U-tube で聞いてみました。

中年男性コーラス（純烈）が歌っている故郷に残している父と母を想う「言葉足らずのメロディー」という曲ですが、これを聞くと涙がでて仕方ありません。年ですね。

水谷眞次郎様 ←太田隆次

早速 YouTube で聴きました。

「私を作ってくれた二人に 言葉足らずのメロディー」と、私の年代では思いも付かない父と母への感謝の言葉に共感を覚えます。いい曲を教えて頂き有難うございました。

YouTube で聴きたい皆様へのご参考までに：

<https://www.youtube.com/watch?v=P1VomqKb3zI>

大田隆次様 ← 水谷眞次郎

早速アップしていただき有難うございました。

戦中、戦後の苦難の中で、両親がどんなに苦労したかと、それを思うと、身につまされます。

## わが母の記

野口幹夫

京女に東男という言葉がある。わが父母は、これとは反対で東女に京男だった。母は高橋たかといい、幼くして両親と別れ、浅草で人形師だった祖父といっしょに生活していたが、関東大震災で大阪に逃れてきた。祖父の死後、大阪で商家をしていた野口家に縁あって、まだ少女だったうちに、女中として住み込んだ。可愛かったそうだ。そこの三男で、大きく男ぶりのいい父雄三郎と相愛で結ばれた。当時は親戚やいとこなど血縁間の見合い結婚が多かった中で、遺伝的に健全な結婚だった。健康な3人の子供を育ててくれた。

私が物心がついたころは、阿倍野で家族経営の印刷業を大きく営んでいた。母はその中で、姑にも仕え、印刷の商品仕上げも手伝い、子育てもするという忙しい、しかし張り合いのある生活を送っていた。子供も3人ともそれぞれに出来て、病気もなく、それなりに豊かで、夫婦仲もよかったので、羨ましく思われる存在であった。

戦争の苦労は世間と同じだった。鉄の供出で印刷業は廃業したが、父は幸い戦争にはいかなかった。大阪大空襲の時、我家にも焼夷弾が落ちたが、なんとという幸いか不発弾であった。だから戦後も家財の売り食いでしのげたようだった。

やがて戦後の高度成長期を迎え、長男の私が高津高校・阪大を経て東芝に就職して初めて我が家の中から、一人独立して家を出て行った。姉の話ではその時も、母は寂しがったりはしていなかったそうだ。私の家庭に孫ができると、それが可愛いと、夫婦で東京までよく遊びに来て東京や箱根などへ足を延ばしていった。

その後、私は幸いにも東芝の川崎の本社工場から、大阪に近い姫路工場に転勤になった。父母はそれを機に阿倍野の家を処分して4年間工場の役職者社宅と一緒に住んでくれた。孫娘に立派な雛人形を買ってくれたりした。父母は近くの太子町の老人クラブ荘に遊びに行く時、きちんと正装して出かけたそうだ。私の妻には、「きちんとしていなければ、課長さんしてる息子に恥をかかせる」といっていたそうだ。

その2年目父は胃がんで亡くなった。母は目に見えてしょんぼりしていた。そして半年後、父を追いかけるように、突然のように狭心症でなくなった。姉はそのことを、次のように書いてくれた。

仲の良かった「ゆーさんとたかさん」は、あの世に行くタイミングも見事であった。

「はよう きなはれ」

「まっとくれやす」

二人はこんな対話をしながら、ゆーさんの行くちょっと後を、たかさんは歩く。まっとあの世でも。

写真は、姫路時代竜野の赤トンボ荘で父の古希の祝いに孫 6 人と子供らに囲まれたゆーさんとたかさん

